

異年齢生活小グループと子どもの発達

—年齢別保育との比較から—

○吉田行男（発寒ひかり保育園注1）

1. はじめに

筆者の園では、10数年前から異年齢交流や混合保育の実践を経て、2002年以来異年齢小グループを基本とする保育に取り組んでいる。そこでは、かつて地域社会の異年齢子ども集団に見られた重層的な人間関係がある程度再現され、園の関係者は、このような保育は子どもの心の発達に良い効果があると実感している。

近年、異年齢保育が注目されるようになり、実践報告を中心とした研究もなされてきた。しかし、異年齢保育が年齢別保育に比べてなぜどのように良いのかについての実証的な研究は皆無と言ってよい。

2. 目的

本研究では、年齢別保育のみの保育、定期的に異年齢交流を取り入れている保育、そして異年齢生活小グループを基盤とした保育それぞれの相互交渉パターンの特徴から、異年齢保育における子どもの心の発達を明らかにし、今後の実践上の課題についても検討する。

3. 方法

(1) 行動観察による比較

まず、年齢別保育のみのA保育園と週1回異年齢交流を取り入れているB保育園と毎日の生活時間帯を2～5歳児の異年齢小グループ（15人前後）で過しているC保育園（いずれもS市認可園）の子どもたちの相互交渉パターンをビデオ観察し、分析する。そこからそれぞれに特徴的な相互交渉パターンを抽出し、その生起頻度を数量化して比較した。

(2) アンケートによる実態調査

S市及び周辺地域の保育園における異年齢保育の取り組みについての実態調査をおこなった。実践現場の生の姿、生の声を反映させるため、回答は記述式を基本とした。対象は公、私立認可保育園計241園で、分析対象は無効回答を除く117園の回答である。

4. 結果と考察

(1) 異年齢保育における子どもの心の発達

a. 向社会性：年上の子が年下の子に思いやりや優しさを発揮し、お世話したり、仲裁したり、生活や遊びを伝承したりしている。

b. 愛着関係：異年齢間に愛着行動が頻繁に見られ、兄弟・親子のような強い愛着関係が育まれている。お互いに心の安定・癒しを図っていると思われる事例がある（写真A）。

c. 受容性：年下の子が、遊びを壊すなどの時も、年上の子が我慢したり、知恵を出し合って工夫したりして仲良く遊んでいる。また年下の子たちが、5歳児を中心とする年上の子たちの寛容で受容的な態度を

見て信頼を深めている（写真B）。

d. 自立心：異年齢間の信頼関係の下、互いを尊重し、その関係を喜び、学び、自立心を養っている。



（写真A）

（写真B）

(2) 相互交渉パターンの特徴（表1）

	年齢別保育	異年齢保育
保育士と子ども	<ul style="list-style-type: none"> 保育士と子どもへの一方向の教育的・養護的関わりが非常に多い 	<ul style="list-style-type: none"> 保育士と子どもの相互交渉は相対的に少ない（年上の子もたちがそれを補完）。
異年齢間	<ul style="list-style-type: none"> 自由遊びや異年齢交流の場面でも（主体的な）相互交渉は、ほとんど見られない（例外：兄弟間、延長保育の子）。 上の子から下の子への一方向の攻撃的関わりが見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 協調的・養護的相互交渉、愛着行動が非常に多く見られ、教育的相互交渉も多い（生活・遊びの伝承を中心に）。 競争的・攻撃的相互交渉は稀であった。
同年齢間	<ul style="list-style-type: none"> 協調的相互交渉が多い。 競争的・攻撃的相互交渉が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 協調的相互交渉が多い（共同で低年齢児のお世話を含む）。 競争的・攻撃的相互交渉はあまり見られなかった。

(3) 今後の実践上の課題

子どもたちのより豊かな相互交渉と心の発達を促す異年齢保育の実践上の課題として、次の諸点が上げられる。

- ①指示・強制によらない保育を如何に実現させるか。
- ②低年齢児を含めた生活中心の家庭的な小グループを如何に形成させるか（多人数のイベント的形式的異年齢交流や、朝・夕の自由遊びでは成果を望めない）。
- ③子どもの情報を如何に共有するか。
- ④良い関係形成を促す環境整備・遊びの工夫を如何にするか。
- ⑤同年齢間の遊びを如何に保障するか。
- ⑥後輩保育士を如何に育成するか。
- ⑦如何に保護者の理解・協力等を得るか。

注1. 藤女子大学非常勤講師